

ゆたか倶楽部 よもやま話

vol. 18

私が初めて小笠原諸島を訪れたのは1971年(昭和46年)のことで、今から約半世紀も前のことになります。当時のキャッチフレーズは、「小笠原の海は一年中泳げる魅力あるところ」で、お客様は主に海水浴客や釣り人が中心の島でした。

小笠原は、太平洋戦争で島民は内地に強制疎開させられ、戦後23年も経った1968年(昭和43年6月)に日本へ返還されています。私が最初に行った当時の母島は無人島で、お客様と浜辺で野宿したものです。母島に再び人が住むようになったのは数年後でした。役場ができ、小中学校ができ、現在は約470人の人々が暮らしています。1972年に小笠原諸島が国立公園に指定され、東京からの定期船「椿丸」が就航しましたが、片道44時間もかかったそうです。1973年には西之島が噴火し、新しい島が形成されたこともニュースになりました。1979年には「おがさわら丸(初代)」が就航し、片道28時間まで短縮されました。

小笠原は、船釣りではロウニンアジ、カ

スマアジ、マグロ、カマス、サワラ、カンパチ、スマカツオなどの大物も狙え、釣り客にとつて魅力的な海です。大島運輸(現マールエフエリー)が運航する小型客船「ふじ」や「にほん丸」(3000トン)、どちらも横揺れ防止装置「フィンスタビライザー」がなく、風速10メートルの風でもよく揺れた船でしたが、よくチャーターしたものです。2年ほど友人の小笠原専門の旅行会社でお世話になった後、1984年(昭和59年)にゆたか倶楽部を起ち上げ、2007年(平成17年)に商船三井客船(MOPAS)「ふじ丸」(2万3235トン)をチャーターし、新春小笠原クルーズを久しぶりに企画・実施しました。



小笠原

お客様も見られるようになりました。2011年(平成23年)に小笠原諸島が世界自然遺産に登録されました。小さい島でありながら、小笠原でしか見ることのできない固有種の割合が高いこと、特にカタツムリや植物において、進化の過程がわかる貴重な証拠が残されていることが、世界遺産委員会の審議で高く評価されたそうです。登録の翌年の2012年には世界遺産人気に応え、ふじ丸によるチャータークルーズを3本企画・実施。2013年には6月の引退が決まっていたふじ丸で、神戸を皮切りに東京・名古屋・清水発着の5コースを企画・実施し、好評を得ました。

その3年後、2016年4月22日、27日に、日立ポートサービスと共同で「にっぽん丸」をチャーターし、「世界自然遺産小笠原・父島・母島クルーズ」を実施。一度のクルーズで父島と母島の両方に寄港するのは「新さくら丸」以来17年ぶりになります。錨泊した母島では乗客380名様全員が上陸し、乳房山登山や地元漁師とめぐる母島列島周遊クルージングなどをお楽しみいただきました。船に乗る前、降りる前には靴の土を水マットできれいに落とし、母島にないものを持ち込まない、母島から持つていかないうえ徹底されています。ヒロベソカタマイマイは反化石の貝殻で、天然記念物のため持ち出しは当然禁止されています。

2013年より日本船最大の飛鳥IIも小笠原に寄港できるようになりました。しかし、クルーズ客船は定期船より大きいので、父島・二見港の岸壁に接岸することが今もできません。そのため、湾内のブイに係留し、通船で上陸することになりますが、その船が地元の漁船であることが、小笠原クルーズの魅力の一つです。大きなブイに船の前と後ろをつなぎ、係留してからは、漁船と客船を繋ぎ、漁船やテンダーボートに乗り換え、ピストン方式でお客様を陸地までご案内します。帰りはクルーズ客船にお客様が全員乗った後、船が湾内を出るまで漁船が見送りをしてくれます。ずっと並行して大きな声で手を振り見送ってくれる「お見送り船」は小笠原名物です。

大型の外国船では係留ブイの幅を超え、寄港できません。仮に小型の外国船であっても日本人漁師とのコミュニケーションを要するため、現状では実現は難しいのではと思います。したがって、今後も日本船3船のみが小笠原クルーズを実施するでしょう。

日本のクルーズ略史

1989年 「ふじ丸」就航

1990年 「にっぽん丸」就航

2007年

ゆたか倶楽部「ふじ丸」で小笠原チャータークルーズを実施